

詩雑誌『三人』復刻版概要

概要—1932(昭和7)年10月創刊号～1942(昭和17)年6月終刊号  
 全6巻(全28冊を合本製本)・別冊1  
 B5判・A5判／上製／総2,334ページ  
 別冊内容—解題・回想・総目次・索引[別冊のみ分売可=本体価格1,000円]  
 解題—山田博光(帝塚山学院大学名誉教授・近代文学研究者)  
 回想—荒木 傳・伊東幹治・大川公一・尾末奎司・北野昭彦  
 野間光子・平林 一・廣重 聰・富士正夫(五十音順)  
 推薦—川村 湊(文芸評論家)・黒井千次(小説家)・長谷川龍生(詩人)  
 原本提供—茨木市立中央図書館併設富士正晴記念館  
 揃定価—本体90,000円+税 ISBN4-8350-1514-2  
 刊行—2002年7月

関連図書のご案内<復刻版>

武田麟太郎||主宰  
**人民文庫** [全26冊・別冊1]

○昭和11年～昭和13年刊  
 ○別冊||解説(小田切秀雄)・総目次・索引  
 ○菊判・並製・総5,034頁  
 ○揃定価||本体180,000円+税  
 ○96年6月刊  
 ○推薦||池田浩士・小田 実・長谷川 啓・水上 勉  
 本誌は、『文学界』の有力同人として文壇をリードしてきた武田麟太郎が一部の同人の時局迎合的空気に反発し、また周囲の若い作家に活動の場を与える意味もあって、創刊したものである。帝国主義の時代に苦悩する左翼文学者たちの最後の砦となった。

文芸懇話会||刊  
**文芸懇話会** [全2巻・別冊1]

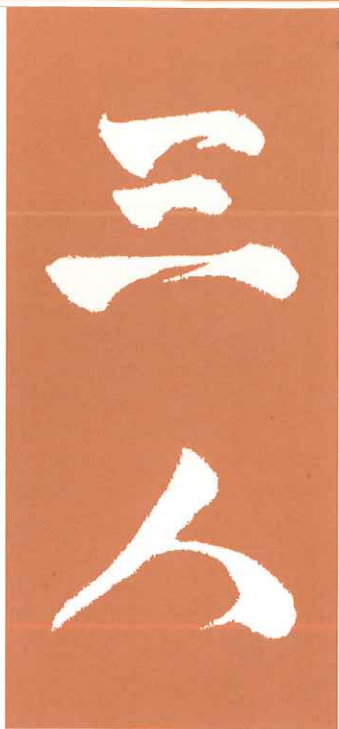
○昭和11年～昭和12年刊  
 ○別冊||解説(高橋新太郎)・総目次・索引  
 ○A5判・上製・総1,516頁  
 ○揃定価||本体53,000円+税  
 ○97年6月刊  
 ○推薦||海野福寿・榎本隆司  
 文壇・文学者のファシズム統合への道を拓いた官民合同の文学団体||文芸懇話会の機関誌。同会は一九三四年三月、内務省警保局長松本学が文化統制を目的に創立、大衆文学・自由主義までの多くの作家を取り込むことに成功した。国家の文化政策とそれに対峙する文学者とのせめぎ合いを明らかにする。

表示価格は、全て税別。

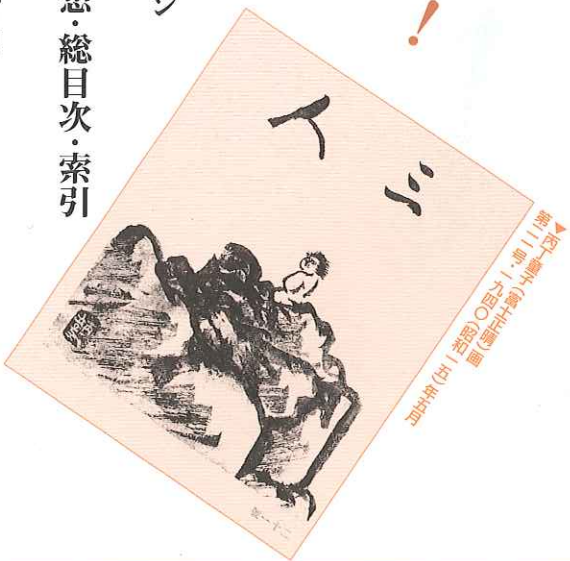
不二出版

〒113-0023  
 東京都文京区向丘1-2-12  
 電話(03)3812-4433  
 ファクシミリ(03)3812-4464  
 振替00160294084

富士正晴・野間宏・桑原静雄||主宰の  
**詩雑誌(一九三二年一月～一九四二年六月刊)を復刻!**



▼全六巻・別冊1  
 ▼B5判・A5判  
 ▼上製・総二二三二四ページ  
 ▼別冊||解題(山田博光)・回想・総目次・索引  
 ▼揃定価||本体九〇、〇〇〇円+税



象徴詩・ジイド・西田哲学・マルクスを溶鉱炉に溶かして、  
 青春の魂を鍛えあげた京都の文芸同人誌。  
 「暗い谷間」の時代、  
 生命と情熱と智能を燃やした『三人』という名の詩文群が  
 七〇年の時を経て、強く鋭い光りを放つ!

二〇〇二年七月一括刊行

不二出版



▼復刻にあたって

一九三二(昭和七)年、象徴派詩人・竹内勝太郎に師事した三高の三人の学生が、詩雑誌『三人』を創刊した。この同人誌はその後、小説、随筆、評論など散文にも力を注ぎ、しだいに同人の数を増やしてゆく。しかし一九四二(昭和十七)年、内務省が指示してきた同人雑誌統合をきらい、第二十八号で廃刊に踏みきったのである。三人の学生の名は富士正晴、野間宏、桑原(竹之内)静雄。戦後かれらはそれぞれの道を歩んだ。富士は人材の育成に努め、自らも作品を次々に著して、「竹林の隠者」と称される独特の境地を築いてゆく。野間宏は『暗い絵』で戦後派の旗手となり、全体小説『青年の環』を完成する。竹之内は、筑摩書房の編集、営業に従事し、代表取締役を務めたのである。

また、参加した同人たちの中には、戦争や病気で志なかばに命を落とした者や、後に著名な学者、医者、評論家となり活躍した人々もいる。それぞれの境遇の中で詩作を続け、その思想を実践したのである。

同人誌『三人』には、富士正晴の後半生を予感させる詩生活第一作「神々の宴」や野間宏の戦後の文壇出世作『暗い絵』の原型となった初めての小説「車輪」など、目を瞠る習作がぎっしりと収録されている。これらの作品を通して私たちは、竹内勝太郎の言う「人間の苦悩の火からこぼり出た寶石である」詩の純粹な世界にふれることができる。このたび小社では富士正晴記念館の全面的な協力を得て、伝説の稀覯誌『三人』の全号を七〇年ぶりに復刻し、広く近代文学・思想研究者に提供する次第である。

不二出版



▶甲虫と戯れる子等(富士正晴画)\*

▼推せんのごと

## 若い詩人たちの交流の場

川村 湊

私は野間宏や富士正晴のあまり良い読者であったことはないが、彼らの疾風怒濤の「暗い青春」時代には興味を持っていた。そこには、共產主義・社会主義と日本浪漫派と近代の超克との奇妙なアマルガムがあった。東京には、杉浦明平と立原道造と寺田透の『未成年』があり、京都には野間宏と富士正晴と桑原(竹之内)静雄の『三人』があった。もっとも、これらの同人誌は、名前を知っているだけで、実際には見たことがない。稀覯本だからである。

竹内勝太郎という詩人(学者)にも興味を持っている。その『藝術民俗学研究』という著書を読んで、折口信夫とも違った芸能の民俗学の可能性を思ったことがある。獅子舞や人形芝居、猿楽や絵巻物への関心など、今少しというか、かなりというべきか、時代を先取りしていたように思われるのだ。竹内勝太郎と、若い三人の詩人たちの交流はどんなものであったのか。『三人』のなかでそれをうかがい知ることができらるだろう。購わなければならぬ本が、また増えてしまった。

(かわむら・みなと 文芸評論家)

## 温もりと湿り気

黒井千次

十代の仲間で作る同人誌には特別の性格がある。大人になってから作られた同人誌には見られぬ、自己形成期の全人的な熱気が隠れているからだ。『三人』が創刊された一九三二年十月、野間宏は十七歳の半ば、富士正晴と桑原静雄は十九歳に達したばかりだった。

先年刊行された『野間宏 作家の戦中日記』藤原書店における三高時代から京大時代にかけての記述には、『三人』に触れた言葉がしばしば現れる。印刷する紙の手配から、「私」は人を軽蔑する。『三人』以外

\*資料提供:富士正晴記念館



▶昭和11年秋 琵琶湖にて(左より桑原静雄・富士正晴・野間宏)\*

の人を」といった同人への信頼と友情、掲載された作品への相互批評の激突、夢にまで出て来る同人同士の間接的の縛れ、自負と不安、やがては不満や反省などが綴られもする。

こういう多感な季節の精神の微妙な軌跡とでもいったものは、それを作る若い手の温もりや湿り気を伝えるような同人誌の原形に、少しでも近く触れることによってはじめて感じ取ることが可能となる。

『三人』の復刻版は、おそらく一九三〇年代の若い魂の復刻でもあるに違いない。

(くろい・せんじ 小説家)

## 新しい詩的伝統を掴む

長谷川龍生

夢に描いていた懐しい詩雑誌『三人』が復刻されるのは、ほんとうにすばらしく、たのしいことである。待ちに待ったという気持ち以上に初老の身上に、青春のいぶきが降りかかってきた実感に、ただおのくばかりである。昭和前半期、ジンゴイズムの時代に、三人の文学青年たちが、抑圧を人一倍うけて、どのように生き、どのように詩作をつづけてきたか、そしてゆたかな感受性を表現の翼をもって、打ちばたいていたか、この眼で、しっかりと受けとめることに、かぎりない探求のよるこびを持つ。

詩の思念、詩のコトバは、おそらく時代をこえて、現代の閉塞状況を打ち破っていくだろうと推測される。時は過ぎゆくものであったが、時のうら側に、打ちとどめ昇華していくコトバの存在は、現代の時を明確に照射するものである。詩雑誌『三人』から、あらゆる輝きの要素を発見することができるだろう。そこに、新しい詩的伝統たるべき三本の柱をかかえこむ事実に出会う。

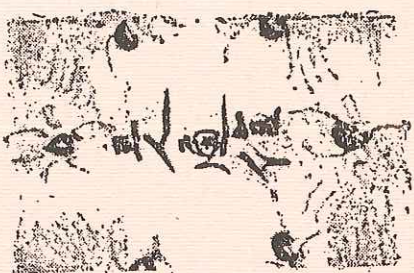
(はせがわ・りゅうせい 詩人)

Table with columns for poem titles and authors, including '神々の宴' by 野間宏 and '車輪' by 野間宏.

▶「神々の宴」原稿(詩生活第一作と正晴自身の朱書あり。昭和7年6月)\*



昭和十一年二月二十五日 印刷 三 人 通信 日九十九年二月二 行



# 雑誌『三人』の立場

富士正晴

同人雑誌に對する考へ方がいまだに變化しないといふことは、人々の側にはなく、寧ろ同人雑誌をやつて行く人々の側にも責任があるといふは思ふ。詩が生まれないから人々は詩を讀まないのだ。『さいふ』(竹内勝太郎日記)こそ眞實だ。勿論、人々が詩をよみ得られる迄の力量を持つてゐないといふことも確かだ。事實だ。併し人々が詩に對する欲望を持つてゐる以上、その欲望を目ざまし、その欲望に答へ了せるだけの詩を、人々の前に置きさへすれば、早速にはじめるのが、人々は詩を讀み過ぎのある時代に於て、日本人は確かに言葉を熱愛した。萬葉集の歌が必ずしも、あそこに書きつけられてある怖ろしい程多数の詩人によつて作られたのではなく、寧ろ少數の天才によつて作られ、賣買されたといふ假説を信ずるにもせよ、そこに確かに我々の祖先が眞に言葉を愛した証據を却つて力強く感得し得るものがある。徳川時代の俳諧も同じこと。そして現代は言葉に對する人々の愛はあるに、かゝらず、言葉に對する詩人の無力をさへ見る。詩人はこの私の見方を肯定しないかもしれない。併し、『日本語は詩を作るに適しない。もつと日本語が整理され

ねば、我々は本當の詩は作れないのだ。』さいふ風な、誠に弱々しい救聲が聞かれる。さいふといふことは、決して詩人の言葉として立派なものではないと思ふ。それは、もつと日本語が整理されたならば、たしかに、我々は詩が作りよくなるかもしれない。併し一體誰が、その呑氣で弱々しい詩人の爲に、日本語を整理するのかが、眞に言葉に對して愛を持ち、日本語を鍛へ上げて行くべき管の、感性にも才能にもめぐまれてゐる詩人に果してこの消極的な考へ方が出て來得るのか。かうした私に對する愛の高慢だと私には見える。『ポカレグレイ』は或る日本人に『日本語は非常に複雑な難しい言葉だといふから、きつさい文學が生れるところでせう。』さいふ意味のここを語つたさうだが、この見方にこそ眞の詩人の積極性が見られる。グレイは日本語を知らないと言へるにしても、この言葉は怠惰な逃避的な救聲と比較にならない位、私達をうなづかせものがある。我々こそ詩作によつて日本語を鍛へ上げて行くべきなのだが、我々こそ日本人に言葉に對する愛をよびさまさなければならぬのだ。このことと同じことが同人雑誌についても言はれる。私達は今も過去の同人雑誌經營の考へ方でもつと行つては

けないのだと考へてゐる。併し、必ずしも、私達の考へが讀者へ通じてゐると思へない。今まで同人雑誌は文壇といふ一つの社會へ出る下準備の學校のようなものと思はれて來てゐる。文壇へ出る一つの踏台として同人雑誌をやつて行く。このこと自体は悪いことでもない。しかし、これからの同人雑誌はかうした所から抜け出して行くだらうと私は考へる。文壇が目的にはならず、同人雑誌そのものが目的になる風に変化して行くのだと思ふ。同人雑誌に對する態度がそれだけ眞敏になり、作家と讀者がそれだけしつかりとむすびつき、一つ一つの同志のようなものとなつて行かれないと思ふ。かう私が同人雑誌の行き方を考へるさいふこそは、『三人』がこの道を現在建設して行くといふ決意の表現でもある。私達は『三人』をそのやうに鍛へ上げて行きたい。文壇は余りに腐敗してゐる。そこには、藝術家に對する愛をもつ商人、どろつき、の態度が充満してゐる。作品、作家の眞の價值よりも、商品としての價值が問題とされてゐる。眞面目な讀者は殆んど常に綜合雑誌に裏切られ、新しく文學に向ふ若い人々はその感受性を文壇の腐毒に傷けられて行く。これは怖れていゝことと思ふ。正義がない。眞實がない。誠實さがない。定見がない。――そして讀者の側もそれに馴らされて了つたやうだ。併し、しかも讀者の求めてゐるものは正義だし眞實だし定見だ。そこに、同人雑誌でなければ實踐出來ない一つの道が発見出來る。この道をさる同人雑誌は、その性質を變へて來る。私はこのことを言ひたか

つたのだ。同人雑誌は同人の良心的態度と、讀者の支持、同人と讀者との眞の接觸によつて成長して行かれない。實行がすべてを解決し、すべてをはつきり見せてくれるのだらう。そこに新しい藝術家の態度が、作家として、讀者として現れて來るのを信じて疑はない。それは實行の決意であり、着手であると言へよう。今、こゝから、私達は出發する。

- 季刊「三人」第四卷 第二號
- 詩 春の機軸 竹内勝太郎  
菜の花 野間宏  
人形の午後 富士正晴
- 小説 ☆  
車輪 野間宏  
沙漢 尼崎安四
- LE DIALOGUE SUR L'ART 竹内勝太郎  
スタンダール ポル、グレイ 井口浩譯  
創作の世界 桑原靜雄  
批評 野間宏
- ☆  
竹内勝太郎追悼 新村出  
竹内君を憶ふ 志賀直哉  
追悼 志賀直哉  
追悼 尼崎安四  
竹内先生を憶ふ 井口浩譯  
師父竹内勝太郎 桑原靜雄  
追悼文 野間宏  
追悼 富士正晴
- 竹内勝太郎年譜
- ☆  
装幀 榊原紫峰
- 一部 四十錢

## 『三人』に對する希望

那須修吉

友人に薦められて『三人』を買はされた。その時には、何のためか、友人の心事が判らなかつた。が、讀んでみて成程と肯か、友人の心事が判らなかつた。それこそ云ふのも、私には、同人雑誌に對して、藝術家としての團志の脆弱や不足に大きい不満を抱いてゐたので、これもそのたぐひだらうと考へたからだつた。この雑誌で強く感ずるのは、何よりも作者の創作態度の眞面目さと美しい若さである。卑しい妥協を嫌ふ、厳しい意志、藝術に對する烈しい愛情、さうしたものゝが作品の隅々に息づいてゐる。讀んでゐるさうして、これは私一人ではなく、『三人』の讀者の共

通の氣持だと思ふ。『三人』が同人雑誌が等しく自戒した、このみよとまつてゐたため、質的にはいつも『三人』の前の醜い敗北の残骸を暴きねばならなかつた。『三人』が眞に藝術の戰士として闘ふためには、斯る批判の上に立つて、現實の諸々の壓迫を克服し歴史を貫く偉大な作品を産んで欲しいと望む。尙この紙上で『三人』紹介の友人に謝意を表し、『三人』發展の爲に私も讀者の一人として力を盡すことを同人詩人に告げて置く。(一九三六、一、十)

## 野間宏への私信

堀場正夫

あなたの『車輪』を讀みました。三十日に讀みはじめ、後半を二日に讀み終えたので、これは僕の怠慢ではなく、没入しようとした僕の讀者としての誠實さが、自ら息苦しさに陥れたからです。こんな息苦しさは、あなたの觀念の世界へどこまで入つてゆけるだらう(このとき、僕の考へは複數の僕になつてゆく)といふ不安――即ち作者の讀者に對する拒絶――が、何かあるといふ強力な、先を知りたいと思ふ興味と、この二つのものの交互に起るたたかひ、それがさせる業です。これは正しく散文の力に違ひありません。あなたが詩人といふよりも、むしろ、すぐれた散文家であることを、讀みながら、また、讀み終つて

日數を経るに従つて、愈々深く思ひました。『指の世界』では尙、整理されるべき幾多の部分を待つてゐるでせう。しかしそれはいま、あなたにまつて問題ではないやうです。あなたか、ひさつの對象をさらへて、墮のふくれるまで、實に満腹するまで描き盡してゐる。そのひたむきな態度、執拗な探追精神、これに僕は大きな好感を持つてゐます。好きな好意をもつてゐます。好意といふよりも、むしろ感動です。あなたは指を描いてゐます。それは實に一人の女の肉体に、つながつた指を、刻明に描いてゐます。しかも、畸形として、の第六本目の指の存在を描いてゐます。それはそれでよいのです。作者としてのあなたは、ひたむきに『指』を描いてゐます。





昭和三

竹内勝太郎 (二八四一九三五年) 詩人、思想家。

京都市下京区に生まれる。三人の命名者である彼は、独学でフランス語を学び詩作に励み、昭和六年、詩集『明日』によって、日本における象徴主義の現代詩を確立した。また、昭和九年、詩集『黒豹』において、ヴァレリーの影響下でラカムの象徴主義から脱け出し新しい展開をとげる。彼の思想をアラン、西田幾多郎に学び、やがて中国の神へと移行していく。昭和五年より京都市美術館嘱託として生計をたて、三人同人たちの指導・育成にあたるが、昭和一〇年六月、黒部峡谷で遭難死をとげる。満四〇歳九カ月の命であった。昭和四三年『竹内勝太郎全集』全三巻は富士・野間、竹之内の三人の共編により思潮社から刊行された。



富士正晴 (一九三一九八七年) 詩人、小説家、画家。

徳島県生まれ。昭和六年三高に入学、一〇年に退学。三人の中心メンバーとして活躍。戦後、島尾敏雄らと同人雑誌『KZG』を創刊し、創作活動を続ける。著書に『富士正晴詩集』『贖・久坂葉子伝』『桂春回遊』『富士正晴作品集』全五巻(岩波書店)等がある。

野間 宏 (一九一五一九九二年) 作家。

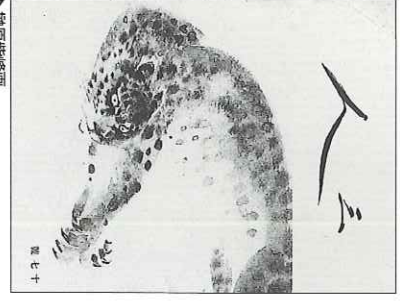
兵庫県生まれ。昭和七年三高に入学、一三年京大公文科を卒業。昭和一九年富士正晴の妹光子と結婚。戦後旺盛に創作活動を続け『全体小説』を構想・実践した。著書に『暗い絵』『青年の探』『完本 狭山裁判』『野間宏作品集』全一五巻(岩波書店)等がある。

桑原静雄 (一九三一九九七年) 小説家、出版人。

静岡県生まれ。昭和七年三高に入学、一五年京大哲学科を卒業。結婚を機に、竹之内と改姓し、河出書房を経て筑摩書房に入社。以降編集等に携わりつつ、昭和四一〜四七年まで代表取締役社長を務める。昭和四四年、小説『ロッキタム号の船長』で芥川賞候補となる。著書に『天司馬大將軍栄光』『先師先人』(講談社文芸文庫)等がある。

井口 浩 二号から参加。大阪歯科医専及高槻医専を卒業。戦後『KZG』に参加。医者。

尼崎安四 七号から参加。三高を経て京大英文科に入学。一九五二年病死。  
吉田行範 一号から参加。三高を経て京大仏文科を卒業。国文学者吉田精一の弟。後NHKの幹部。  
瓜生忠夫 三号から参加。三高を経て東大独文科を卒業。のち映画評論家。  
伊東幹治 四号から参加。三高を経て京大国文科を卒業。戦後『KZG』に参加。サマソフの全集を刊行。  
北脇昌雄 一六号から参加。八高を経て京大医学部を卒業。桑原静雄の実弟。一九四三年戦死。  
富士正夫 一八号から参加。高知高校を経て阪大医学部を卒業。戦後『KZG』に参加。医者。  
堀内 進 二号から参加。戦後『KZG』に参加。  
高林武彦 三号から参加。三高を経て東大物理学科を卒業。のち名古屋大学教授。  
中村 晃 一四号から参加。東京府立第一中学校卒業。横浜税関監吏。一九四五年戦死。  
房本弘之 一四号から参加。大阪市の住吉中学を卒業。詩人伊東静雄の紹介で入会。戦後病死年月日不詳。  
矢分崎恒子 二八号から参加。尼崎安四の妻。女性で唯一の同人。  
河野健二 一八号から参加。三高を経て京大へ。当時、京大経済学部助手。  
加藤憲吾 一八号から参加。中村晃の中学の同級生。のち大阪府地方事務官。  
石井正之助 二八号から参加。中村晃の中学の同級生。のち東京女子大学教授。



柳原紫峰画 第一号 一九三九年四月

柳原紫峰 (一八七一九七一年) 日本画家。

京都市に生まれる。本名・安造。明治四年京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)を卒業。文展に作品を出展し注目を浴びる。大正七年村上華岳らと国画創作協会を結成して文展を離脱。昭和二年母校の教授に就任。晩年は画壇を離れて宇治平等院等の壁画模写指導を行った。「第三者の容喙を許さない心友・竹内勝太郎を介して『三人』創刊号にカツムリの絵を提供し、一号からは毎号表紙の原画とその印刷費を寄付した。」



同人たち

▼内容見本 最終号百次(二九四年六月)より

【5%に縮小】

Table with 3 columns: 表紙の言葉, 詩作品, 挿し絵. Lists authors like 竹内勝太郎, 加藤憲吾, 伊東幹治, etc.

▼三人関連年表

Table with 2 columns: Year, Event. Lists events from 1932 to 1948, including university enrollment, magazine founding, and deaths.

トラストイは戦争と平和の中で自由と必然との関係について、「絶対の自由もなければ、絶対の必然もない」と言っているやうに思ふ。自由とは勿論、意志についてのことであり、必然とは神についてのことである。併し、絶対の自由がないとしたら、私はどうして生きることが出来よう。自由と必然の問題は、一個の人が存在するとき、その人は、自己の存在を否定することとは絶対に対峙しなくてはならぬ。最早見送られる。では、生きると言ふことは、何であらうか。

生きるといふことは、行為により生きさせられてゐるといふことだ。(すべては、行為により在らしめられてゐる。)しかるに、私が生きると言ふことは、その生きて行くときのことの内界活動そのものから見て、決して何物にも支配されない絶対の自由性を持つてゐなければならぬ。もし、又、さう感じもする。此處に、己が世界を保ち、あらゆるものを養ひて行かうとする、あらゆるものを組立て、行かうとする意志がある。併し、一度、それを反省し、振り返り、その内界活動そのものを、靜止的なもの、或は、その或る状態として、反省的に、把へて見ると、

【98%に縮小】